

第 18 回 大賞(金の星賞)受賞作品

「セミのぬけがら」

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎一年 山木 晴香



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



大賞 〈金の星賞〉

『セミのぬげがら』

大阪府 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎一年 山木 晴 香

思わず悲鳴をあげていた。

バツと目の前に出された茶色でカサカサしたそれは、大悟の白い手によってさらに気味が悪かった。

セミのぬげがら。

最後に見たのはいつだったっけ。もう、夏かあ……。そんなことを考えながら、まじまじと見てみる。

「あれ？ 理音^{しおん}、これ、嫌いじゃないの？」

不思議そうに大きな目を丸くして、わたしを見つめる。ちょっと、おもしろくなさそう。

「そりゃ、人間、急に目の前になんか出てきたら、驚くでしょ」

「ふーん……。理音は女の子だから、こういうの、嫌いだと思ってた」

「そんなことないよ。こうなる前は兄さんに連れ出されてよくセミ取りしに行ったし」

もう、そんなことできないけどね。そんなセリフとともに、自嘲^{じちやうてき}的な笑みをもらす。

今年の春、わたしは中学校の制服を一度も着ることなく、入院することになった。今は、七月の初め。完全にセミの季節だ。

となりにいる大悟は、小学四年生から。わたしとは、違う病気で。大悟は心臓が悪いんだけど、わたしはどつやら血液の病気がらしい。わたしがショックを受けると思ったのが、両親が病名を教えてくださいなかつたのだ。

病院内の学校で、二人だけが同じ年だったので、仲良くなった。でも、大悟は病気ではないんじゃないかと思うくらい、元気だった。だって、

「でもこれ、どうしたの？」

「父さんと、あの山にとりに行ったの」



ってことができるくらいだから。わたしはといえば、最近一回目の治療が終わってほっとしているところ。もうすぐ二回目の治療もはじまるから、外に出るなんて、もってのほかだった。

「いいなあ……」

わたしが小さな声でそっともらすと、大悟は静かに笑い、個室の病室、わたしが寝ているベッド近くの大きな窓のサッシに、セミのぬけがらを置いた。

外のセミの鳴くけたたましい声にまぎれて、ぬけがらが、カサツと音を立てた。

それからしばらく、まともに会うことはできなかった。二回目の治療がはじまり、わたしの体調がとてつもなく悪くなったからだ。点滴のチューブをつけ、髪の毛が抜けた姿を見てほしくなかったし、何より治療のせいで免疫が下がり、感染症にかかりやすい体になってしまった。一日、何も食べず、気持ち悪くて、苦しくて、動けない日々が続いた。

夏の終わりかけ、やっとわたしの体調も元に戻ってきた。少し立って、歩けるくらいに。そしたら今度は

「見て見て！ 父さんとつくったんだよー！」

大悟は、まだ声変りをしていない甲高い声と口へて長い指で、たくさん
のセミの標本を見せてくる。

「えっとね、これがミンミンゼミで、透明の羽のやつがクマゼミ……」
「そうやって、意気揚々として話してくる姿を見ると、うれしくて、でも悲しくって。気づいたら涙をぼろぼろこぼしてた。」

「わたしも、思いつきり、セミ取りしたいよ……。こんな、頭で、ずっとベッドで寝てるなんて、やだよ……」

そう言って、ニット帽をとると、大悟の息を呑む音が聞こえた。

「……ごめん」

大悟は、標本を脇にかかえると、そのまま部屋を出ていった。大悟が置いてくれたセミのぬけがらは、いつのまにか無くなっていった。



その日から、わたしたちの時間は、ぎくしゃくとしたものになっていった。一応、わたしの元気な間は毎日来てくれるんだけど、前みたいに仲良くげらげら笑い転げることはなくなった。

そして、秋が来た。

大悟はやっぱり、病気だった。

急に、大悟の具合が悪くなったのだ。こんなことは初めてで、わたしはただおろおろするばかりだった。大悟は、わたしが大変だったとき、何を考えていたのだろうか。

院内ハロウィンパーティーでお菓子をもらったときも、大悟はいなかった。十一月になっても、大悟が会いに来てくれることはなかった。わたしは、会いに行こうにも、筋力が落ちて車椅子で移動しなければならぬし、感染防止で極力、部屋を出ることは許されなかった。

そして、全く大悟に会えないまま三度目の治療に入った。わたしは、また、寝たきりの日々。ときどき、自分が誰か、わからなくなるときだってある。

気づいたら、夏だった。二度目の、夏。

わたしが本を読んでいると、大悟がひょっこりと現れた。前と同じように、セミのぬげがらを手に持って。

わたしは、また泣いた。

「理音は泣き虫だなあ」

と言いながら今度は大悟も泣いた。声変わりしかけた、ハスキーな声でお互い、無事で良かった。カツラつきの帽子がとれてしまうことも気にせず、泣いた。そして、大声で笑った。

でも、そんな日々は長くは続かなかった。

四度目の、治療。

苦しい、苦しい、もう慣れるかと思ったけど、やっぱり慣れない、でも、大悟はがんばった。わたしも、がんばらなきゃ。

……ふと、目が覚めた。何も聞こえない。わたしは死んだのかと思った。でも違った。



窓を見ると、目を細めたくなるような快晴のもとで、一匹のセミが飛んでいた。ふらふら、ゆらゆら。そのセミは、窓にぶつかり、ゆっくりと落ちてゆく。そして、ガラスを隔て、大悟のくれたセミのぬけがらの前で、動かなくなった。

わたしはまた、目をとじた。

わたしは、個室から四人一部屋の大部屋へ移動することになった。大学一年生の兄さんと骨髄こつすいの型が一致し、移植してもらえなくなったのだ。もう、わたしが何の病気であるかはとっくにわかっている。すぐ、菌が全く入って来ない無菌室に入れられるはずなのだが、まだ空気がでないのだ。

わたしのベッドは、窓際。ただ何もせず一日中外を眺める日々が続いた。知らない間に秋は過ぎ去っていった。

冬になると、隣のベッドに違う人が入ってきた。わたしと同じくらいの男の子。じっと見てたら話しかけてくれた。

「こんにちは」

声変わりは、していない。

「……何歳？」

「十二歳です」

「一つ下かあ、入院したばかりなの？」

「はい。あつ、僕、藤澤かえです」

「わたし、長谷川理音。よろしくね」

その日から、わたしとかえではよく話すようになった。

ある日、何気なしにかえでが聞いた質問に、答えるまでは。

「理音さんって、ここ、長いんですよね」

「そうだよ」

「でも、もうすぐ移植だから、あとちょっとですよね」

「そんな、移植してからが大変なんだから」

「え！ そうなんですか。親、全然教えてくれなくて」

「わたしもそう。だから調べた」

「すごい、ぼくはそんな勇氣ないです」

「そんなことないよ。わたしが色々教えてあげる」



「ありがとうございます。お礼と言ってはなんですけど、」
「うん」

「理音さんって、セミ、好きですか？」
「……」

うそ。どうして。

「理音さん？」

「うん、好き、大好き」

「やった！ 僕、昆虫採集が趣味だったので、たくさん標本を持ってるんです。親に取ってきてもらうんで、プレゼントしますー！」

「……だった。」

「え？」

もう止めることはできなかった。わたしは、また泣いてしまった。大粒の涙を流して、大声をあげて。

セミ。それは、わたしと大悟を結ぶ、たった一つの糸。

大悟は、死んだ。もっと早く気づくべきだったんだ。セミ取りをしているなら、手があんなに白くはならない。心臓の病気は、外に出て、虫取りなんて、しちゃだめだ。あるとき、言ってあげれば、たった一言、

「わたし、大悟と話せるだけで楽しいよ」
って。言ってあげれば、大悟の心臓に負担なんてかからなかったはずなのに。

かえでは、何も悪くない。

でも、それからかえでの顔を見ると、その出来事が思い出されて、話しくなくなってしまう。たまに、目が合えばひと言ふた言話すぐらいだった。でも、かえではしきりに話しかけようとしてくれていた。

そうこうしている間に、かえでの治療開始日と、わたしの無菌室への移動が決まった。かえでの治療はわたしが無菌室に移動した翌日にはじまる。

一日だけ、外泊許可が与えられて、わたしは、家に帰った。家族とたくさん話し、新しい帽子を買ってもらい、

おいしいごはんを食べる。中学生になるまでは当たり前だと思っていた日常が、とても幸せだったことに気づいた。



賢治のまちから 高校生★電話大賞

外泊から病院に戻り、いよいよ移動が始まる。わたしは、車椅子でかえでの近くに行き、ひさしぶりに話しかけた。

「かえで」

かえでは、驚いていた。そして、にっこりと笑ってくれた。

「今までごめん」

「いや、そんな辛いことがあったなんて、知らず、とんでもないことを…」

かえでの顔をじっと見ても、もう、悲しくならないし、涙も出てこない。「かえでは悪くないよ。話し相手になってくれて、とてもうれしかったし。それでね、」

わたしはそのままずっとかえでの前に手をつきだした。

「わっー！」

予想どおりの反応に少し気がよくなる。

「これ、あげる」

わたしは、かえでにセミのぬげがらをプレゼントした。大悟の、形見。

「無菌室には持って入れないから、かえでが持っておいてよ」

「いいんですか!?!」

「いいいよいよ、大切にしてね。」

気づいたら、泣いていた。かえでも、泣いてくれた。かえでは、その、クマゼミのぬげがらについて、たくさんのことを話してくれた。本当にひさしぶりに、大笑いした。

わたしたちの、さよならだ。

そしてわたしは、無菌室で入院三度目の春をむかえた。進級祝いをもらっても、何もうれしくない。高校にはちゃんと行けるのか、不安だった。

かえでは今、どうしてるかな。辛い治療で、死にたい、なんて思っていないかな。

そんな日々を過ごし、ついに、夏の初め、骨髄移植が行われた。

その日から、わたしは変わってしまった。



ひどい吐き気に襲われ、一日に何回も吐き、感染症にもかかってしまった。おたふくみたいに顔がふくれて、別人のようになってしまった。だれがだれなんてわからない。

苦しい、辛い、助けて、助けて、助けて、お父さん、お母さん、兄さん、大悟、かえで、助けてよ。頭の奥で叫び続けた。

あーあ、わたし死ぬのかな、最期くらい、セミみたいに自由に飛びたかったなあ……。

気づくと体が軽くなっていた。あれ、前も同じようなことがあったな。わたし、今度は本当に死んじゃったのかな。わたしは、空から、病院の無機質な白い壁を眺めていた。あ、これ、死んでんじゃない。よくここまでがんばったよ、わたし。

……あれ？ 違う。わたしの体、空にのぼる気配がない。かといって地獄にいくほど悪いこと、してない。

じゃあ、幽霊になっちゃったの!?

えー、いやだよー!

「シュワシュワ、しゃあしゃあー!」

うそ、わたし、今『おーい! 誰かー!』って言ったんだよ。もしかして、と病院の窓に近づく。窓に自分の姿をうつすと、

そこにはセミがいた。羽が透明の、クマセミ。

「じゃあ! (ええッ!)」

わたしは驚きと喜びでとびあがった。ぐんぐん上昇し、屋上につく。楽しくなったわたしは、そのまま自由にブンブン飛んでみた。景色が動いてちょっと気持ち悪いけど、体を感じる風が心地よい。

もしかして、あのととき動けなくなっちゃったセミって、大悟だったのかもしれない。死ぬ前に、わたしに会いにきてくれたのかな。

ってことはわたしも死ぬの?

うれしい気分はつかのま。急に恐怖が体中をかけめぐる。セミになっているはずなのに、悪寒がした。

その前に、もう一度、家族に会いたい……。

ゴン!



急に、頭を殴られたような感覚に襲われた。目が覚めると、そこはわたしの家の前。ぼーっとそれを眺めていると、玄関が乱暴に空き、小学六年生の兄さんが飛び出してきた。

「ほら、早くセミ取り行くぞー！」

「お兄ちゃん！ ちょっとまってよー！」

毎日聞いていた声。あれは、幼い頃のわたし。その後ろにはお母さんとお父さんもいる。

もしかして、願えば、行きたいところに行けるのかな。

試しに、小六の夏休み、と念じてみた。すると、

目の前にプールではしゃぎまくるわたしの姿が。どうやら、他の人たちがら今のわたしの姿は見えない様だ。

自慢だった長い髪を二つくりにして満面の笑みを浮かべるわたし。見ていると、なんだかとても切なくなってきた。

大悟の夏休み、と念じてみる。

目の前には入院中の大悟の姿。大悟のお父さんが、取ってきたセミを渡すと、大悟はそれを大事そうに広げ、

標本にするために針で固定する。そして、お父さんに満面の笑みで

「これを、理音に見せるんだ！ それがあかりとの約束」

あかりって誰？ ほかほかとあたたまる心に疑問がわく。

あかりさんと大悟、と念じてみると、高校生くらいのお姉さんと、まだ小学生の大悟が楽しそうに話していた。

「これ、おねえちゃんとの、約束ね。男の子は、女の子をしっかりと守ってあげるのよ」

「うんー」

そして指切りをする。この病院にはあかりさんという高校生はいなかったから、もしかすると、亡くなってしまったかもしれない。そして、あかりさんも、セミになって、大悟に会いに行ったのかな。

それからわたしは、いろんな夏を見て回った。一度、前の外泊、と念じてみたけれど、どうやら夏にしか飛べないみたいだ。



お母さんとお父さんの夏、友達的美穂と麻衣の夏、好きだった健一君の夏。そしてかえでの、夏。

いろんな夏を見ていくうちに、わたしの心はどんどん空しくなっていた。

生きたい。もっと生きたい。たくさんを経験して、いっぱい笑って、いっぱい泣いて、どんなにつらくてもいいから生きたい。

わたしは、また、泣いていた。セミだから、涙は出ない。でも、心では大泣きしていた。

「理音は泣き虫だなあ」

大悟のセリフがよみがえる。そう、わたしは、泣き虫だ。泣きながら、生きていたい。

セミは、命の儂はかなさの象徴。

長く眠り続け、地上にでておおよそ一週間で息絶える。

わたしはそんな存在になってしまったけど、まだ生きたい。

でも、わたしの長い長い夏の旅は、終わりを告げようとしていた。

うまく飛べなくなっていた。羽が思うように動かない。少し飛んだだけで、体が重い。

もうすぐ、死ぬのか。こんなに、生きたいって願ったのに、神様は、とっても非情。

最期にかえでのところに行きたい。

ぱっと景色が変わった。

かえでは、窓際の席に横たわっていた。頬ほおはこげ、とても瘦やせていた。

窓のサッシには、いつか、わたしがあげたセミのぬけがらが置いてある。

かえでが、うっすらと、目を開けた。その目に、光はなかった。

わたしは力なく、ふらふらと飛んだ。

わたしが、教えてあげなきゃ。大丈夫だよって。乗り越えれば、きっと治るよって、なくさめてあげなく

ちゃー！

生きたい。やっぱり、生きたい！ こんなところで、死にたくなんか、ない！

それでも、わたしの体はゆっくりと落ちてゆく。



賢治のまちから 高校生☆生活大賞

落ちて、たまるか、死んで、たまるか！
体中の力を羽に込める。でも、体は言うことを聞いてくれない。
目の前が白くなっていく。

……そういえば

わたしは、セミになりたいって、セミになって自由に飛び回りたいて思
った。そしたら、セミになれたんだ。

じゃあ……！

「来年の、夏に行きたい、いや、未来の夏に生きている、わたしになりた
いー！」

フツと意識がなくなった。

目が、覚める。ここは……。

「あなた！ リ、理音が、目を開けた！」

無菌室の外から、お母さんの大声が聞こえる。バタバタという音。しばらく
くして看護師さんが入ってきて、

カーテンを開けてくれた。

首だけを動かす。そこには、お母さんと、お父さんと、兄さんがいた。

わたし、生きてる……。

乾いているはずの、泣きはらしたはずのわたしの目から、涙がこぼれた。
わたしの顔、ひどいんだろうなあ。これから、わたし、どうなるんだろ
う。

いろんな想いが、わたしの頭を駆けめぐる。

でも、大悟、かえで、わたし、生きてるよ。

ちゃんと、息吸って、泣いて、生きてるよ。

『生きる』という言葉を心でゆっくりとかみしめる。

中三の、夏。わたしは、生きている。